

特集
卒業の日に

バイトについて

退職するに当たっての寸感



文学部教授

塚本康彦

Yasuhiko Tsukamoto

ドイツ語の「アルバイト」がまともな労働なり研究なりを意味するは、私とて承知している。而してこれには、内職、の語意はおよそ含まれぬようなのだが、本邦にあつては、往時を知る人ぞ識る、アルバイト・サロン（縮めて、アル・サロ）なる文句が流行したのだつたし、当今各辞書内、該項について「②学生が学業のかたわらに行う内職。バイト」なぞといった語釈が一律に登載されて

いるのを見るであろう。

私は居常、言葉がやたらに簡略化されるのを好まず、だからして、題目を取ってこう書いたところに、私の、いわばイロニーを察知してもらいたいのだけれど、いかにも、刻下、業種は様々であれ、一時間八、九百円というのが相場らしい、この内職・バイトに励む学生、比々として皆然りの様相に、青眼、に非ず、白眼を遣らずにはいられないのだ。聞説、

バイトが彼等の起臥・寝食の中に占める割合は啻ならぬものがあるよ
うで、それこそ先の辞書内の文言とは逆に、傍に逐われるのは学業の方
という、浩歎すべき果が結ばれるに
至っているのではなからうか。

自国・日本間の貨幣価値の落差の甚だしきがゆえに、仕送りはほとんど無効、バイトによつて糊口を凌ぎざるを得ぬ留学生の群は別に措く。まずは食べて行ける、一般学生が

あたかも何かに憑かれたみたいに、あつたら二度と還らぬ青春の日々をばバイトに蕩尽するのは何故なのだろう。彼等は、そう、「つれづれなるままに、日くらし」自室に籠りきるなんてことに耐えられないのである。

我身にも覚え有り、半世紀前、学生の私は無為無聊を持って余していた。机上には、何時間費やしても数頁しか読解する能わざる書物が置かれていた。想いは結ばれて解けず、胸裡の磁気あらしに苦しんで、今日も空しく暮れる。悪魔だつて、こんな不景気な青年を誘惑しようとはせぬ。

もしバイトが口を開けて待つていたのだつたら、私は遅疑無くそこに駆け付けたように思われる。なにしろ一時間幾らの割で金員は確実に入手可能なのだから、（最低、これだけの仕事を熟した）との満足感に浸れるのだから。さりながら、翌日、例の書物は私の目にいとどしく疎々

し気に映り、結句、辛うじて継続していた、その読解の途は断絶するに及んだであろうこと、疑いを容れまい。幸いなる哉、往昔、バイトは街衢に溢れていなかった。

尤も私達教師にしたところで、例えば他大学の非常勤講師、というまことにお手軽な内職と無縁ではない。何を匿そう、私自身、本学に専任として禄を食んでの約四十年間に数校に出講、渋谷に在るミッションスクールのそれなど、三十余年の久しきに亙った。本来非常勤講師とは、余人を以てしては替えがたい、特殊な講座に斯道の権威・俊英が故事に謂う、三顧の礼によって招聘される、といったようなものなのだろうが、実際には多く、私ごとき有象無象が俗臭ぶんぶんたる縁故関係を通して攫取する、誰が担当しても許される内職口以外ではないのである。教師達は、いかなる理由に拠って右の内職・副業に精出すのか。鼻のシラノ

風に申さば——「都雅で行けば」高貴な研究用の多額な書籍費、「ざっくばらんで」住宅ローンの返済や洒落・美食上の快樂等々が列挙されることになるであろう。

だがしかし、他人は知らず、私にとつて内職の功德たるや、一にかかつて、既述の（最低、これだけの……）と甘心するところに存した。まさか、当初からそんな思念を得べく、他校の講師を勤めたわけではない。だけれども、充実・難解な書物の読過が儘ならず、意気込んだ割には筆路が拓かれぬというような場合、出講して二、三コマを熟し、事後、疲労感、そして儉安、の語を用いてもいい、まさに一時的な充足感で軽く酔ったみたいなき分を覚えてから、この内職から足を洗えなくなってしまうのである。

私はこの内職の正當化を図って、こんな風にも考えてみた。すなわち、今や国文学界においては書く人口が

読む人口を上回る、と皮肉られる程印刷物が氾濫、それらは操志を喪い硬度を失って、忽卒・安直・模倣・反復の汚点に塗れた文章で埋められている。事態かくのごときならば、同じ内職に従うにしても、いわゆる売文の徒となるより、一日百数十分から二百分以上喋りつ放し、という具合に肉体を酷使する方に文学的な浄潔性は保持されるのではなからうか。かの高見順は、戦時中従軍作家として行動するに際していみじくも言ったではないか、「身は売っても芸は売らぬ」と。

嘗ての異常な年における、高見の積言に凭れ掛かっている私見が誤謬乃至無意味なるは、これとても先記したように、内職の日の当晚・翌朝、書物は伝説の樹帚木みたいに追えば遠ざかり、筆端は膠状化し文字を容易に生ぜしめぬところから明白である。傘寿をとつくに過ぎていながら、最近も雄篇『斎藤茂吉』を梓行した

西郷信綱先生、多年月一日一枚執筆を履行しておられるが、その岩石のごとき持続力は、あの日吉在、高圧線下、崖中腹の第宅に蟄居してこそ叶えられるものなのだろう。事実先生はこの呉下の旧阿蒙に対して、仕事の中断の怖さを説き、副業はおろか本業までも辞することを促して歇まなかつた。

与えられた紙員が尽きかけている。例によって均衡を欠いた叙述になつてしまつたが、真のアルバイトの達成にはバイトの減殺・禁遏を必須とする、という趣意はどうやら納得されたかに思われる。止めを刺すに、白洲正子がどこかで書いていた、癩に触るくらい素敵な明言をば藉りるとしよう。「暇をつくるというのは強い意志を要することで、充実した仕事をするよりも、いいかげんな所で忙しがっている方が、はるかに楽だ」。